みなと・新橋 今・むかし 新聞

第12号

令和5年3月

『語り継ぐということの重要さ』

東北では、平安時代より連綿と地震・津波の記録が残り、明治29年には、三陸地震で、2万2千人被災死しております。東日本大震災では、過去の記録・記憶は伝承されていましたが、けっして過去の災害の経験が活かされたとは言えません。現在は、情報量が多い時代でありますが、その時代に実際に体験してみなければ、あやまった行動をしてしまいます。侵略戦争・自然災害、経験した人々は、どのように感じ、どのように行動し生きていたのか?その当時の状況等直接聞かなければわからない部分が、たくさんあります。当事者の体験談を、語り継ぎ、その当時の風習・社会ついて考えるため、語り部の方々の体験されたことを記録に残す必要を感じ、『みなと新橋今・むかし新聞』を今年も発行します。

『小学校三年生　学童疎開』

山口　和良

大東亜戦争に突入、昭和十六年真珠湾攻撃で生活が一変しました。昭和二十年三月小学校三年生の時、戦火がひどくならないうちにと栃木県塩原温泉の上会津屋と言う旅館に親元を離れ集団疎開しました。旅館と言っても食糧事情は最悪でした。初日だけ魚が付きましたが終戦まで肉・魚類は口に出来ず、大豆七分米三分と重湯の一膳めし。おかずは、山菜（自分達で山に入り調達したもの）・切り干し大根、ピンポン玉くらいのジャガ芋の煮つけ。栄養失調者が続出しました。

家に帰りたい気持ちを親に書いても検閲があって見つかると非国民、不届き者と言ってなじられ、一部の上級生は階段から足げにされ落とされたとも聞きました。手紙には、お父さんお母さんお元気ですか日本が勝利するまで自分達も頑張ります。としか書けず、軍隊と変わらない生活でした。助かったのは家の近くの傘屋のお姉さんが保母さんとして来ており、そのお姉さんが、夜中に見つからないようにそっと布団の中でおにぎりを食べさせてくれました。涙流しながら、口にしました。

昭和二十年八月十五日　終戦の天皇の玉音放送を聞き、子供心に悲しさと安堵感が交差して不思議な気持ちでした。これで家族の元に帰れる。汽車の切符が中々手に入らず父が迎えに来たのが、九月に入ってからでした。栄養失調で頭の毛がぽよぽよになり腕や胸はやせ細り肋骨もくっきりと出ていて、これが息子かと目をうたがったと後で父から聞きました。お金を払って旅館で作ってもらった白米の弁当おかずも魚が入っていて美味しかった記憶は、今でも時々思い出します。

父は、戦時中は人のつてで刀鍛冶（軍刀づくり）の仕事を鎌倉・材木座の山中で携わっており、兵役はまぬがれたようです。保養のため、鎌倉で一週間ほど体を休めていた時の鎌倉の海の青さと空のすみきった青空に平和を感じました。

『今や思い出に残るのみ』

井上　繁

私は港区に九十年ほど前に生まれ、戦争中の疎開と戦後焼け跡に家を建てるまでの三年半ほどを除き、港区でずっと暮らしてきました。戦前、私が住んでいた田村町界隈は西洋家具の製造販売のメッカでした。田村町一丁目から御成門にかけての、市街電車が走っていた日比谷通りの両側には、大小の洋家具の販売店が数多く並んでいました。

家具店以外にも様々な商店が存在していて、私の家近くで言えば、田村町四丁目電車停留所の西南側の角に果物店、それに連なってパン屋、タバコ屋、家具店、薬屋、かるた屋、おもちゃ屋、自　転車屋、クリーニング店が並んでいました。

大通りから一歩奥へ入ると、表通りの家具店の下請けをしていた数多くの木工屋、そして関連する業種として、材木商、製材所、椅子張り屋、塗師屋、金　物商、工具商などがありました。

職人の家は住居と仕事場が兼用、間口が二間とか（一間は約一・八二ｍ）二間半の家が殆どで、その多くが一階の道路に面した部分が仕事場で、玄関らしいものはありません。その仕事場の奥に、裏の路地に面して出入口と台所と便所があり、仕事場は夜になると住込みの使用人や見習いの寝部屋となります。家族は二階で暮らしている家が多く、それも部屋数は一つか二つ。当時は子供の数が平均四、五人はいましたから、殆どの家が狭い中での暮らしでした。当時は、持ち家は少なく、多くが借家住まいでした。私が生まれた家は二軒長屋、小学生の頃引っ越した先は四軒長屋で、どちらも借家でした。

戦争が終わると、戦前暮らしていた三分の二前後の人が徐々に戻って来て、七、八年もすると、戦前に近い状態になりました。但し地主が空襲の焼け跡に家を再建して貸すということは無くなり、殆どの家が地主から土地を買うとか借りるとかして自前で建てたのでした。

ところで、昭和末期のバブル経済は町の姿をがらり変えてしまいました。一帯はオフィスビル化し、個人の家は殆ど姿を消しました。住人も殆ど引っ越してしまいました。近隣の人がお互い親しく触れ合って暮らしていたあの賑わいは思い出として残るのみです。

『怪我の功名』

髙橋　雅雄

一九三七年に白金三光町の神応小学校に入学、その頃の幼年時代は平和な日々が続き、同年代の友達と楽しい毎日が続いた。但し、男の子と女の子とは一緒に遊ぶことは殆ど無かった。中でも大体きまった時間にきまった場所で紙芝居屋が来て金属製の鐘か木製の太鼓の合図が聞こえてくると、あちこちの露地から子供達が湧き出すように集まってきてにぎやかな空間が生れた。紙芝居屋が持って来た水飴、せんべい、ラムネと思い思いの駄菓子を買って紙芝居の物語のとりことなる。紙芝居のほかにも夢中にさせたものがあった。

中でも、屋根のついたリヤカーにあかがねの大鍋をのせて、はんぺん、じゃがいも、こんにゃく、ちくわなどなどを煮込んでからしをつけ竹串で突きさしてかじるおでん屋は、人気があった。

小学校に続いて中学試験が待っていた。当時は東京府立八中への入学試験に、二名が合格。学制も変って府立が都立へ。五年を過ぎて旧制東京高校入試は倍率が十五倍ほどだったが、奇跡的にも合格。一年後またもや新制大学試験が待っていた。東大へは不合格だったが、千葉大学園芸学部造園学科へ入ることができた。家業が植木屋だったので、目的は達したことになるのだが高校、大学の学費稼ぎはどうするかとなった。運よく隣家の主人がガリ版書きのプロだった。今日ではガリ版書きの言葉は死語同然だが、謄写版印刷の文字書きである。油性の紙を鉄やすりの上にのせ、硬質の芯の特種な鉄筆で書かれた文字や絵を通して、油性のインクをローラーから転写する印刷技法のことを謄写版印刷と呼んで学校の教材などを作ったものだ。字や絵が上手なことが必須要件で、賃金は当時としては破格のものだった。学生のアルバイトとしては友人から羨ましがられたし、文章や文字に独特のくせがついて何の仕事にも大いに役に立った。怪我の功名と言ったところか。

『昭和の映画』

池田　林太郎

昭和は映画が全盛の時代でした。

映画館は大入り満員で、立見の人も多く、上映中にクライマックスでは、拍手が一斉に起きました。戦時中、私はアニメ「桃太郎の海鷲」を見て、子供ながら鬼畜米英の感情を抱きました。後にこの映画は海軍の国策（プロパガンダ）であったことを知りました。

その他、「ハワイマレー沖海戦」「加藤隼戦闘隊」等、国民の戦意を高める映画が数多く上映され、日本軍強しが、宣伝されました。

ニュース映画は大本営発表の下で、常に日本有利の戦果が映され、国民は日本が敗戦の道を歩んでいることを知りませんでした。

終戦後、米軍（GHQ）の管理下に置かれた映画会社は時代劇（チャンバラ）の制作が禁止され、人気役者の片岡千恵蔵も、腰の両刀を二挺拳銃に持ち変え、侍から探偵に変身し「七つの顔」を演じました。また、反戦映画として「ひめゆりの塔」「二十四の瞳」等の名作が生まれました。

その一方、外国映画が流入し、華やかなハリウッド映画、シックなヨーロッパ映画が人々を引きつけました。特に少年達は（ターザン）（ウェスタン）に夢中になり真似をして遊びました。そして「風と共に去りぬ」が封切られると、そのスケールに圧倒

され、日米の国力の差を実感しました。

でも、日本映画界も「羅生門」「七人の侍」「東京物語」等、秀作を世界の映画祭に出品し、金賞を得て実力を示しました。

しかし、テレビが普及するにつれ、映画界は徐々に勢いを失いました。最近の上映される内外の作品は、CGが多用されてスクリーンが派手になりましたが、ストーリーが淡く、心に残る映画が少ないと感じます。やっぱり昭和時代が懐かしく、見直したい心境です。

『バンカラな時代』

武　恒雄

（バンカラとは、ハイカラの対義語・粗野や野蛮に振舞うこと）

国民学校（戦時下に皇国民の錬成を目的とした小学校）の五年・六年は、父親の転勤により仙台で過ごした。住まいは、仙台近郊、陸奥国分寺の近くの静かな場所でした。

その静かな場所の夕暮れ時になると、大きな笛声が、風に乗って聞こえてくる。姿は見えないが、旧制第二高校の学生と思われる歌声が聞こえてくる。校歌が、寮歌が、応援団の歌なのか？ゆっくりとした曲調だが力のこもった合唱である。破れ帽子に年季の入った羽織・袴の団長に合わせて、声を張り上げている。きっと、食事もなくすきっ腹を抱え寒さに震えていたとしても、大声を張り上げているのであろう。子供時代の記憶に強く刻まれた、一場面であり、私のバンカラに対する憧れでした。

『八十七歳のお正月』

中嶋　房子

喜れに、夫の三回忌を供養し、静かなお正月を迎えました。庭のさざんかの花びらが赤い絨毯のように明るい心持にしてくれました。結婚は、よりの良き半分、ベターハーフと仏様で兄から云われた言葉をつくづく思い出されました。一人になると、年々生活が変わるわよ！先輩からの言葉に、なるほど！

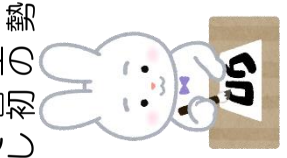
自分がその立場にならないとわからないものですね。

六十年以上の楽しかった生活が思い出され感謝の元日でした。息子、孫、曾孫と健康で新年を迎えられたことと事が何よりのお正月でした。アメリカに留学中の孫がニューヨーク大に合格したこと、ドイツの友達宅に旅行したこと、若い人たちは、それぞれの目的に進んでいるようでした。夫も私も戦争を体験しておりますので、次の世代は、世界の知識を広く深く学んでほしいと思っております。

私は桜田小二年のお正月、昭和十八年、当時元日は全員登校、日の丸の式典で、赤白のお菓子をいただいたこと（甘味のない時に）

家族で分けていただいたこと、暗い時代、父親が茨城の田舎に疎開するように急に家を買ったこと。桜田小二年の時が、走馬灯のように思い出されました。当時、一月一日に登校し、一日に、つわものゝ、といみもわからず、お書初めしたこと。

鳥森神社に書道の先生がいらして、兄妹で通っておりました。書道が大好きになった環境だったのでしょうか一静かに硯で墨をする、こころ良い瞬間が大好きで大切です。〃墨の香り〃



筆をとったら、力をこめて、勢いよく書くように書道の先生の常々の教えでした。孫のお書初めを眺めながら思うお正月でした。

『三井礼子さんの思い出』

佐藤　すみ江

祖母佐藤昌子が経営していた、麻布十番図書館の近くのインク会社が空襲で全焼。祖母や母の大学生の弟達は知り合いの鈴木家の片隅に、私と母と妹は麻布永坂二番地三井邸の二角に。三井礼子氏と高篤氏は焼け残ったお蔵に住まい、広い庭は大学生だった四人の叔父（母の弟達）が畑を作り野菜等を作っておりました。

（注）三井礼子氏（女性史研究者・歴史家　女性解放・ジェンダー論の先駆け　著書に　『近代日本の女性』『現代婦人運動史年表』）

私が小さかった頃、可愛い妹と花を摘んでドウダンツツジの生垣を通り、『お蔵のおばちゃん　はい！』と花束を手渡した。三度目位に、やさしく『ごめんなさい。もう花びらがなくなったの』と優しく断られました。

とても素敵な方でした。

『駄菓子屋さん』

佐藤　同

朝の散歩途中に、住宅地の中で小さな駄菓子屋さんを見つけた。店舗の構造は、住居の玄関脇に建て増しされた簡易なもので、いかにも、子供向けサイズ、天井も入口の引き戸も低く作られた二坪程の作り。製品の陳列は綺麗に並べられていて昔の駄菓子屋さんの雑多なイメージとは異なるが懐かしい。

自分が小学生だった頃（昭和三十年代の後半）には、家の近くに、たくさんの駄菓子屋さんがあり、どのお店も、人の良さそうな年配のおじさんやおばさんが一人で店番をしていて、小さな子供が一人でも気軽に入れる雰囲気がお店全体にあった。良く通っていたのは、家から十分程の、商店街のはずれにあるお風呂屋さんの近く。

お客は子供ばかりで大人の姿はない。

ひとりで行くか、同学年の幼なじみと一緒に出掛けた。親からもらったお小遣いを握りしめ、買い物に行くのが、楽しみでしょうがない。持っていく金額は、せいぜい一〇円、多い時でも二〇円、それでも十分楽しめた。（当時小学校三年生のときのお小遣いは月に三〇円だったと思う）

お菓子類は、一円～五円でたいていの物は買うことができる。ガムやアメなどは、一枚一個からバラ売りされており、一円で買える物も、たくさんあった。お菓子は、キャラメルやチューブ入りのチョコレート、ラムネに風船よーかん、ふ菓子・ソースせんべいに梅ジャム、ストロー状の容器に入ったゼリー・紙ニッキ・カタクチキ等々。カタクチキそれ自体はけっして美味しいものではないが、きれいに動物の形等に割ることができると景品が貰える。

おもちゃ類では、メンコやビー玉、おはじき、風船・シャボン玉・ロウ石、コマ類、今では禁止されたB弾・かんしゃく玉、小石を飛ばして遊んだパチンコ等、そして種々のあてくじもあり、駄菓子屋さんには、当時欲しいと思うものが、何でも置かれている夢のような世界だった。

『語り部座談会　それぞれの思い出』

語り部メンバー

二〇二二年定期語り部の会で、むかしの風景を懐かしんみ、当時を偲び話し合いました。

・戦争時の血液検査

戦前・戦中の町内会のグループは、班長のもと上意下達が徹底されていました。特に戦争中には、防空頭巾に血液型を記載するため集団で血液検査を室外で行っていました。試験管を用いて耳たぶから採取した血液型はO型でした。

結婚し第一子出産時に検査をしたところ、A型でした。戦中戦後、怪我をして輸血することがなかったので、驚いました。

・港区愛宕山（周辺）

芝の愛宕山には、一九二五年～一九三八年の期間NHKがラジオを放送していました。

愛宕山は、標高二五・七ｍ　東京二三区内で最高峰の山です。頂上に放送局があり脇の坂道より車が上がって行きます。

マルチタレントの走り、徳川夢声さん、赤毛のアン等の翻訳者　朝ドラ「花子とアン」モデルの村岡花子さんが、車で通います。当時は全て生放送。６時に入る村岡さんは時計代わりで、家に帰る遊び終了の合図でした。

・京成電鉄行商列車（なつは電車とも）

裏木戸から自分の身長ほどもある背中の荷物をおろしながら、母親に話しかけている野菜の行商のおばさん。「今日は青梅あたりを回ったけれど、売れ残ったので安くするから買ってよ」関東大震災後都心部の物資不足より始まった京成電鉄・常磐線の行商列車。朝、成田周辺から京成電車に乗り込み、都内各地のお得意様へ販売。現代の産地直送販売。物流が発達する前は、取れたての新鮮な野菜を食べることが出来たのは、行商のおばさんのおかげ。

はるーさの『語り部』ってなあに？

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。平成十五年度からは、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

さらに平成二十八年からは、港区平和青年団の事前研修の一環として、高校生の皆さんとの交流会を行い、少しでも戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えるべく活動しています。地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。ぜひ、興味のある方は、はるーさん「語り部」担当までご連絡ください。

発行・問合せ
住所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋三-十六-三
電話　03-3431-1606　FAX　03-3431-1619
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（はるーさ）